

主 題：あなたへの祝福を忘れない5—罪の力に対する勝利③—
聖書箇所：随所

イエス・キリストの救いに与っているひとり一人はそれにふさわしく生きていきなさいと、そのようにみことばは私たちに勧めています。私たちは勝利者であるから勝利者としてふさわしく生きるのです。世に対する勝利者であるからそれにふさわしく、死に対する勝利者であるからそれにふさわしく生きなさいと言います。私たちがそのように生きることによって、私たちをそのような祝福に与らせてくださった神を明らかにするのです。前回、私たちは罪に対する勝利者として生きなさいというみことばのメッセを聞いて来ました。それにはどうすればいいのか？

☆「罪に対する勝利者」として生きるにはどうすれば良いのか？

A. 神のことばを信じること

どんなときにもみことばを疑うことなくしっかりみことばに立って歩み続けなさいと。

B. 神の助けを求め続けること

同時に、私たちには人間の知恵や力ではなく、神の助けが必要です。感謝なことに、私たちにはもう十分な助けが備えられています。その神の助けは、神の命令を実践していくために必要な助けです。神の備えられた力は、神の命令に従うにふさわしい力です。私たちは神の命令を聞くときに、そのような人に変えようとしている神のみ旨を知って、期待をもって生きることができるのです。そこに神の助けがあるからです。

今日はその三つ目を見ていきます。

C. 誘惑に近づかないこと : 罪から離れる

罪の誘惑に勝利するためには誘惑に近づいてはならない、当然のことです。罪から離れていなさいということです。パウロはIコリント6:18で「不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。」と教えています。「不品行を避けなさい」と。この「不品行」とは「性的な不道徳」です。それを避けなさいと命じられています。しかも、この命令は現在形で記されているので、継続して罪から離れ続けていきなさいということです。「避けなさい」という命令はここだけではなく、IIテモテ2:22にも記されています。「それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」とあります。このことばも現在形の命令です。避け続けていきなさいと言います。

パウロが「若い時の情欲を」とテモテに宛てて記しているのは、テモテがパウロよりも若かったこと、恐らく、このときは30歳台であったろうと言われているのですが、そして、ここに書かれている「情欲」は先に見た「不品行」とは異なります。性的な罪だけでなく、様々な肉の願いに対する警告でもあるのです。たとえば、富や権力に対するもの、また、成功に対する渴望、人間的なプライド、同僚へのライバル心、物欲、そのようなありとあらゆるものに対してパウロは教えるのです。テモテよ、気を付けなさい。それらのものから離れ続けて行きなさいと言います。

・人は自分の欲によって誘惑される : もちろん、私たちは誘惑を受けるのは私たちのうちに原因があるということを知っています。ヤコブが言うように「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」(ヤコブ1:14)。釣り針にかかった餌に魚がおびき寄せられていくように、私たちも誘惑に引き寄せられていく、そのことをヤコブは記したのです。そこに問題があるということです。私たちのからだは罪を犯さない栄光のからだをいただいているなら、私たちは心配することはありませんが、私たちはまだこの肉をもっているのです。私たちのこの肉が私たちを罪へと誘惑していく、そのことを知っています。それだけではありません。

・それ以外にも誘惑するものがある : みことばが警告します。

「友」=私たちがどんな友人をもつかということ、そのことについても警告を与えています。Iコリント15:33「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。」と、ですから、友だちを選ぶことにおいて注意なさいということです。願わくは、私たちが本当に求める友人はともに励まし合いながら、主に喜ばれる道を歩んで行こうという信仰の友です。パウロが言うように、もし、あなたが正しくない友人をもったり、また、そのことを願ってその人たちといふなら、そこから良い習慣がそこなわれてしまうのです。箴言13:20に「知恵のある者とともに歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害を受ける。」とある通りです。このような人たちの友となっははいけないのです。彼らから離れなさいと言います。

「この世の流行」＝また、私たちが誘惑するものとして「この世の流行」があります。ヤコブ4：4をご覧ください。「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」「貞操のない人たち。」と呼んでいるのはクリスチャンとは神と婚姻関係を結んだ者だからです。ですから、神以外のものを愛することはまさにそれは不貞を働くことなのです。ここに「貞操のない人」でなく「貞操のない人たち。」と記されているのは、そのような人たちがたくさんいるということです。ヤコブはここで「世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と大変厳しく記しています。もちろん、皆さんよくお分かりのように、この世は神が造られた天地のことではないということは明らかです。ここで言われている「この世」とは「神を信じない、神に逆らうこの世」のことです。サタンを主として、彼の考え方に沿って歩んでいるこの社会のことです。ですから、この世が益々悪に染まっていくのは、その背後にだれがいるのかを明らかにするのです。神ではありません。サタンです。もちろん、神の許可の上です。自分の意のままにすべてのことを為そうとするのです。

また、「世の友」とあります。この「友」はフィレオというギリシャ語から来ています。愛することであり、何かに対して愛情をもつことです。ですから、世に対して愛情をもつ、世を愛する、まさにそのような人のことをヤコブは「その人は自分を神の敵としているのです。」と言うのです。私たちはこの世からいろいろな影響を受けます。悲しいことに、神に従うことよりも神に背くという影響を受けます。この世のマスメディア、映画、音楽、テレビ・ラジオはもちろん、書籍に至るまで、また、新聞に至るまで、私たちはそれらを見て、確かに、そこに放映されている映像は自然の美しさを表わしているかもしれないが、そこで語られるコメントは聖書に従うものではありません。何億年前にそれが造られたとか、そのように進化して来たとか、聖書の教えを真っ向から否定しています。そういう「嘘」をもって人々を神から引き離そうとしています。こんな世と友になりたいなら、こんな世を愛するというなら、あなたは神の敵だと言います。ヤコブは「…神の敵としているのです。」と記していますが、「している。」ということばは「その選択をあなたがしている」ということを意味し、しかも、現在形を使っているのです。その選択を継続して為しているということ。だれかから強制されたのではない、自分から進んでそのような選択をしていると言うのです。つまり、余りにもたくさんの人たちがこの世を愛して、この世から影響を受けているのです。「貞操のない人たち。」と言っているのが信仰者の中でということ。クリスチャンだと言っている人たちの多くがこの世の影響を受けてしまっているのです。

なぜ、「アイドル」ということばを使うのか？「アイドル」とは「偶像」です。対象は人間であったり趣味かもしれませんが、それらがいつの間にかあなたにとって偶像になっているかもしれません。ですから、ヤコブが私たちに教えることは、もし、この世と友になりたい、この世を愛するなら、あなたは神の敵だということ。神が憎むものを愛するからです。ヨハネはこのように言っています。Iヨハネ2：15「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」と。どちらかです。この世を愛するのか、神だけを愛するのか…。マタイ6：24（ルカ16：13）のみことばを見ましょう。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

みことばは私たちに「誘惑に対して、罪に対してどのように勝利していくのか？」を教えてください。

☆勝利を得る方法：では、どうすればいいのか？

・誘惑から逃れること＝誘惑から逃げることで、それが勝利の方法だと見て来ました。一つのいい例を聖書の中に見ることができます。ヨセフというすばらしい信仰者のことです。創世記39章にそのことが記されていますが、多くの方はよくご存じでしょう。簡単に見ていきますが、この39章にはヨセフがどのような人物かということ、彼の特徴が四つ書かれています。

(1) 神とともに歩んでいた(1-3、5節) 1節「ヨセフがエジプトへ連れて行かれたとき、パロの廷臣で侍従長のポティファルというひとりのエジプト人が、ヨセフをそこに連れて下って来たイシュマエル人の手からヨセフを買取った。」と、ヨセフはポティファルに買われました。2節「【主】がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の主人の家にいた。」、3節にも「彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。」とあります。5節には「主人が彼に、その家と全財産とを管理させた時から、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。それで【主】の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。」と、神の祝福が与えられたことが書かれています。なぜ、そのような祝福が与えられたのか？間違いなく、ヨセフは神とともに生きていたからです。神とともに歩む人物だったのです。神の前を正しく生きていたのです。それゆえに、神はヨセフを祝されたのです。

(2) 神を畏れていた(9節) 主人の妻がヨセフに言い寄って来ます。そのときにヨセフはこのように言います。9節「ご主人は、この家の中では私より大きな權威をふるおうとはされず、あなた以外には、何も私

に差し止めてはられません。あなたがご主人の奥さまだからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。」、神の目を意識していたこと、神の目を畏れていたことが明らかです。ヨセフは確かに神を畏れる人として歩んでいました。

(3) 罪を憎んでいた(9節) 9節に「そのような大きな悪事をして、」とあり、彼が罪を憎んでいたことが分かります。

(4) 誘惑への対処法を心得ていた(10、12節) 10節に「それでも彼女は毎日、ヨセフに言い寄ったが、彼は、聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、彼女といっしょにいることもしなかった。」とあります。彼がこの誘惑から勝利するためにしたことは「近づかなかったこと」です。また、12節「それで彼女はヨセフの上着をつかんで、「私と寝ておくれ」と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。」、そこから逃げたのです。そこに留まっていなかった。

ですから、罪の誘惑に勝利する方法は、誘惑から逃げることです。自分は霊的だからどんな誘惑にも勝利できるなどと思うのは、その時点で敗北への道を辿り始めることは明らかです。残念ながら、私たちはそんなに強い者ではありません。誘惑からできるだけ距離を取ることです。どんな誘惑があっても、自分自身を守るためにはそれらからできるだけ遠く離れることです。

D. 互いに助け合うこと

罪に対する勝利者として生きるための四つ目は「互いに助け合うこと」です。Iテサロニケ4章を見てください。パウロはテサロニケのクリスチャンたちに対して、これから信仰者としてどのように歩み続けるのかということをお教えます。テサロニケのクリスチャンたちは神の前を正しく歩み神を喜ばせる生き方をしていたということがこの4:1から記されています。「:1 終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。」、彼らは神に喜ばれる歩みを学び、それを実践していたのです。

この後を見ると「:2 私たちが、主イエスによって、どんな命令をあなたがたに授けたかを、あなたがたは知っています。:3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、:4 各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、:6 また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれらすべてのことについて正しくさばかれるからです。これは、私たちが前もってあなたがたに話し、きびしく警告しておいたところです。:7 神が私たちを召されたのは、汚れを行わせるためではなく、聖潔を得させるためです。:8 ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。」、

パウロは、どのように生きていくのかを具体的に教えていきます。一つ目に、「性的に聖くあり続けなさい」ということです。二つ目は9節に「兄弟愛について」書かれています。「兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。」と。そして、三つ目は13節から記されている「再臨に関すること」です。キリストの再臨に対する備えのことです。この教会のクリスチャンたちはこのように歩んでいました。だから、パウロは益々そのように歩んでいくように、もっと聖くあるように、もっと兄弟姉妹たちが愛し合っていくように、そして、イエスがいつ帰って来られるか分からないからその備えをもって歩むようにと言います。18節には「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」とあります。

このような歩みをしていたすばらしい教会、テサロニケの教会の人たちに益々そのように歩むようにとパウロは勧めるのです。なぜ、こんなことを勧めたのか？このような生き方が大切であり、このような生き方こそ神の栄光を現すものだからです。このような歩みを通して私たちは、神がどのようなすばらしいお方であるのかを世に明らかにしていくのです。そこでパウロは益々そのようでありなさいと勧めたのです。Iテサロニケ5:11には「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」とあり、まさに、このような教会である、これを目標にしてしっかりと歩んでいくようにと、パウロは勧め励まします。

◎罪の弊害 : 心の中に罪があるのなら…

皆さん、私たちが罪を抱えていてもそこには何も祝福もないことはよくご存じです。

・神は祈りを聞かれない = 罪を持っている人の祈りを神はお聞きにならない、なぜなら、罪を持っている人は神のみこころではなく自分の思い通りに生きようとするからです。罪を告白しながら生きるのが私たちですが、そのことをしたくないのです。みこころに沿って生きることより自分の思い通りに生きていきたいと。恐らく、その人の祈りは「どうか、私の願いが叶いますように、私が望んでいることをあなたが為してくださるように、」でしょう。でも、私たち信仰者の祈りは、神がどのようなお方であるかを知っているゆえに、「主よ、どうかあなたのみこころが成りますように、」です。

・祝福(平安、喜び、感謝)は与えられない = 同時に、罪を持っている人に神の祝福はありません。

その証拠に罪を持っている人の歩みには平安も喜びも感謝ありません。気付かなければいけません。どんなに大きな祝福を自分は逃してしまっているのかということに…。どんな環境に生きていても、何があろうとなかろうと、私たちはその中で主の喜びをもって主の平安をもって生きることができます。でも、そのようなすばらしい生活を私たちは罪によって逃してしまっていないか？私たち信仰者は目覚めなければいけません。自分の歩みをしっかり吟味することです。

・教会も祝されない（アカンの罪がイスラエルに敗北をもたらした事、ヨシュア記7章） = ですから、罪の中を生きることによってあなた自身の祝福を失ってしまいますが、その災いはあなた自身だけでなく、あなたを通して教会全体にそれが及んでしまいます。私くらい罪の中を生きていても何の問題もないのではないかと考えていませんか？イスラエルの歴史を見たときに、一人の罪によってイスラエルが敗北したことがありました。ヨシュア記7章に書かれているアカンの罪です。同じように、今この時代にあっても、罪によって教会全体が祝されないことがあります。ですから、私たちひとり一人は自分の歩みをしっかりと吟味することです。

・神の懲らしめがある = そして、罪の中を歩み続けているなら、その信仰者には必ず神からの懲らしめがあります。神はあなたを愛しておられ、あなたが罪の中を歩み続けることを喜ばれません。そこで、神はそこから立ち返るようにと懲らしめを与えられます。罪の中を生きていても何の祝福もありません。自分も、そして自分の周りも。感謝なことに、私たちの神は赦してくださる方です。何度でも赦してください。その方の前に出て来ることです。みことばを見てください。Iコリント11:17、30「:17 ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。」「:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」、ヘブル12:15「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、」

☆だから、個人のためにも、教会のためにも、罪から離れるように励まし合い戒め合うこと

なぜ、私たちには信仰的な兄弟姉妹が必要なのか？本当の兄弟姉妹たちは褒めるだけではありません。もし、罪の中に歩んでいるなら、そのことを愛をもって戒めます。「あなたのやっていることは正しくない、あなたの語っていることは正しくない。」と。ですから、パウロはこのように言っています。コロサイ3:16「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」と。ここで使われている「戒め」ということばは「叱る、諭す、たしなめる、忠告する、勧告する」という意味です。私たちは主に仕える者として、そして、主を愛する者として、主がおっしゃったことを行う者たちです。私たちは人の間違っているところを愛をもって訂正すること、それを矯正させることは大変難しく感じます。そんなことを言えば友情が崩れてしまうのではないかと、人間関係が壊れてしまうのではないかと危惧します。皆さん、私たちが恐れなければいけないのは神が何とおっしゃるか？です。私たちが恐れるのは人ではありません。神を恐れなければいけないのです。私たちの責任は神が何とされているか？を考えることです。その責任はあなたに与えられているのです。あなたがどのような選択をしてどのように生きていくのか？それはあなたに与えられた責任です。

みことばがあなたに勧めることは、まず、自分自身が罪から離れていること、そして、愛する兄弟姉妹が罪の中にいるなら、それが間違っていることを愛をもってそのことを伝えることです。そうして私たちがお互いに神の前に正しく歩んでいくように、そのように生きていくのです。ソロモンはこう言っています。箴言28:13「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。」と。私たち信仰者は、神に喜ばれることを願い、そのように生きていこうとします。しかし、悲しいことに、現実には神が喜ばれないことを何度も何度も選択するわけです。その度に私たちは神の前にそれを告白してまた従おうとし、また失敗したなら告白して従っていくのです。そのようにして私たちは生きています。そのように生きることによって私たちは成長するのです。みことばはそのようにして生きなさいと教えています。そのために私たちはお互いが必要なのです。お互いにその罪を明らかにして、そして、祈り合って助け合って、そして、戒め合って主のみこころに従っていくのです。

E. 主を忘れないこと

どうすれば罪の誘惑に勝利できるのか？その第5番目は「主を忘れないこと」です。「いつも主を覚えている」ということになりませんが、そのために必要なのは、

1. 神のみことばをいつも思い起こすこと

私たちの心がいつも神のみことばによって満たされ続けるということです。皆さんがよくご存じの詩篇119:11には「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。」とあります。みことばを心にたくわえた、こころに貯蔵したと言うのです。また、詩篇37:31には「心に神のみお

しえがあり、彼の歩みはよろけない。」と書かれています。なぜ、よろけないのか？神の教えがその心にしっかりとあるからです。ヨブ記 22：22にはこのようなヨブのことばが書かれています。「神の御口からおしえを受け、そのみことばを心にとどめよ。」と。このようにみな同じようなことを教えています。神のことばを心に蓄えること、心に留めることを忘れてはならないとみことばは私たちに言います。ヨシュアもこのように言っています。ヨシュア記 1：8「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。」と、何のために？「そのうちにしるされているすべてのことを守り行うためである。」と、これが目的です。「そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。」

皆さん、あなたはどうすればあなたの信仰が成長し、あなたが益々イエスに似た者になっていくのか？その方法をご存じです。神が教えてくださるみことばに従うことです。そのときまで信仰の成長を見ることはありません。神がみことばを通して「これがみこころだ」と示してくださること、それに従っていくのです。その時に私たちの信仰は成長していきます。でも、信仰が成長するためにみことばを実践しなければいけないのですが、実践するためにはそのみことばをしっかりと心に留めておかなければ、どのようにして実践できるでしょうか？ですから、ヨシュアも神のことばを「あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。」と、いつも覚えていなさい、そうでなければ実践できないと言っているのです。

私たちは荒んだ者です。礼拝が終わって帰る途中でもうそのメッセージを忘れてしまっているかもしれません。それではどのようにして実践できますか？実践しなければ信仰の成長は見られないのです。ですから、こうして旧約の勇者たちは私たちに教えてくれるのです。彼らもこのようにして生きたのです。神のメッセージを聞き、そのメッセージを守り行っていくために、彼らはそれを昼も夜も絶えず口ずさんでいたのです。詩篇 1：2にも「まことに、その人は【主】のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」と書かれています。みことばを実践するためにそうするのです。神が言われたことを守り行うためにです。先に見たコロサイ 3：16のみことばも「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」と私たちに勧めています。

あなたが考えなければいけないのは、あなた自身の信仰生活においてそのような歩みを為しているかどうかです。みことばを聞いているかもしれない、でも、すぐに忘れてしまうならどのようにして実践できますか？そして、忘れてしまっただけではどのようにして成長できるでしょうか？神が語ってくださることをあなたは心して聞かなければいけないのです。そして、その神が語ってくださったことを実践するという責任があなたにはあることを忘れてはならないのです。神のことばは私たちに真理を教えてください、みこころを教えてください。みことばが語られるときには、聖霊なる神は不思議な方法で皆さん一人ひとりの心に働いてくださいます。このみことばを皆さんの心に留めておいてください。

私たち一人ひとりが覚えるべきことは、聞く私たち一人ひとりには責任があるということです。そして、この信仰の勇者たちが教えてくれることは、彼らも工夫をして、みことばを実践するためにどうしたら良いかを考えそれを実践したことです。日夜このみことばを口ずさんだと言います。私たちもそうします。確かに、年齢とともにいろいろなことを忘れがちになります。だから、メモをとったりして忘れないための工夫をします。日々の生活ではそのようなことをするわけです。問題は、信仰生活においてどうか？です。

皆さん、私たちが神のみ前に立った時に、神はあなたの信仰が成長したのかどうか、イエスに似た者になったのかどうかを問われます。だれかのせいにはできないということです。あなたの成長のためにはすべてのものは備えられていたからです。私たちに必要なことは「主のことばを信じてそのみことばに従っていきます」というその行動です。主はあなたに対して「良くやった」と言ってくださるのか？「良い忠実なしもべよ」と言われるのか？それとも「怠け者の信者よ」と言われるのか？その選択は私たち一人ひとりにあることを忘れてはならないのです。だから、私たちは常にみことばを覚えるのです。

2. 主を常に賛美すること

また同時に、賛美も私たちを罪から離れさせてくれます。罪と賛美とは相容れません。神を賛美しているときに罪を犯そうとは思いません。思い出してください、罪を犯しているときは私たちの口から賛美がなくなります。ヘブル 13：15に「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」とあります。賛美は神に対するささげものであると言います。私たち信仰者がいつも神を賛美しているなら、私たちは罪の誘惑に対して少なくとも勝利を期待することができるのです。

・「主を忘れないこと、主を覚えること」に関してヤコブは次のように教えています

ヤコブ 4：8「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」と。

(1) 神に近づきなさい : この「近づきなさい」ということばは命令形です。「神に近寄りなさい」ということです。でも、そのためには条件があります。「罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」です。ですから、私たちが神に近づくには、自分自身の罪をしっかりと洗いきよめていなければならないということです。詩篇73:28でアサフはこのように記しています。「しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語りあげましょう。」と。実は、この詩篇のみことばをギリシャ語に翻訳した七十人訳では、この「神の近くにいることが、」というのが、まさに、祭司がいけにえをささげる時、宮の中で奉仕を為すこととしてこのことばが使われます。想像して見てください。祭司が宮の中でいけにえをささげようとするのです。宮にあって奉仕をするのです。そのとき、間違いなく祭司にとって必要だったことはきよめることです。イエス・キリストを信じたあなたは祭司です。だから、あなたは神の前に立って人々のためにとりなしをするのです。私たちが人々のために祈るといのは神の前に立って他の人のためにとりなしをします。それは祭司的な働きをしているのです。ですから、私たちが神の前に立つときには自分自身の罪をきよめて立たなければならないのです。

(2) その結果 : 「そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」、これが結果です。ヤコブは私たちに教えてくれます。ヤコブが教えてくれるのは「神はあなたとこのような交わりを喜ばれる」ということです。私たちが考えなければいけないことは、私たちはこの全知全能の神と特別な、そして、親しい交わりを持つことが赦されているということです。そして、神はそのことを望んでおられそのことを期待してくださっています。でも、その交わりを妨げるものは何かというと「罪」です。あのアダムとエバが罪を犯した時に、エデンの園にあって劇的な変化が起きました。その一つは、園にあってアダムとエバは神の声を聞きました。そのときに彼らはこれまでとは違う行動を取ります。創世記3:8「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」、彼らは神から身を隠したのです。これまで親しい交わりが持っていたのに、神の声を聞いた彼らは隠れたのです。罪が原因です。しかし、私たち信仰者はその罪が赦されたのです。神と再び親しい交わりを持つことが赦されたのです。神の御顔を拝してこの方を崇拜することが赦されたのです。だから、私たちは常に神の前に罪を告白しながら生きることが必要なのです。

◎詩篇73篇から「アサフの証」を見ていきましょう

先に73:28でアサフのことを見ましたが、アサフは誘惑を受けます。失敗しそうになるのです。でも、彼はそこから勝利をします。そのことが73篇に記されているので簡単に見ていきます。1-2節「:1 まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。:2 しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。」、「すべるばかりだった。」と言っています。つまり、確かに神を信じているが、それにも拘わらず、神への信頼を失いかけていたということです。なぜ、この信仰者の神への信頼が揺るいだのでしょうか？その理由が3-12節に書かれています。アサフは神に逆らう者たちの繁栄を見てそれを妬んだのです。3節に「それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。」とある通りです。神への信頼を失いかけますが、その後、それを取り戻すのです。どうしたことだったのか？彼自身の告白を見ていきましょう。

(1) 神に逆らう者たちの歩み : 彼らは神に背を向けて傲慢な生活をしていました。6節「それゆえ、高慢が彼らの首飾りとなり、暴虐の着物が彼らをおおっている。」、8-9節「:8 彼らはあざけり、悪意をもって語り、高い所からしいたげを告げる。:9 彼らはその口を天にすえ、その舌は地を歩き巡る。」と、あたかも、彼らは自分たちがこの世のすべての所有者であり支配者であるかのようにふるまっていたのです。大変傲慢な者たちだったのです。決定的なことが11節に記されています。「こうして彼らは言う。「どうして神が知ろうか。いと高き方に知識があろうか。」と。好き放題な生活をした彼らが最後に言うことは「神は我々の罪を全然知っていない。わかっていない。」です。

(2) アサフの葛藤 : このような人たちを見ていてアサフは葛藤を覚えるのです。なぜなら、神に逆らって傲慢な生活をしている彼らを見ると、自分たちよりも幸せそうに見えたからです。彼らはこの世において成功を収めている。彼らの生活は物で満たされている。しかも、見ていると何の問題もなく幸せに人生を終えようとしている。それに比べて自分は…と、アサフは自分を見るのです。3節「悪者の栄えるのを見たからである。」、4-5節「:4 彼らの死には、苦痛がなく、彼らのからだは、あぶらぎっているからだ。:5 人々が苦勞するとき、彼らはそうではなく、ほかの人のように打たれない。」と。自分たちは苦勞しているのにこの人たちは違ふと。14節を見ると「私は一日中打たれどおしで、朝ごとに責められた。」とあります。私には悩みや苦しみや災難や主からの懲らしめと思えることが連続している。なぜ、こんなことばかり続くのか？そして、その神に逆らう者たちを見た時に、見る限りはすべてに恵まれていて彼らは幸せそうだ。自分は問題ばかり…「どうしてなのですか？神さま」と。彼は神の約束を疑い、そ

のことを彼は告白するのです。しかし、17節からすべてが変わります。

(3) **アサフの勝利** : 17節「私は、神の聖所に入り、ついに、彼らの最後を悟った。」と、つまり、アサフが改めて気付くことは、この地上の生活ですべては終わらないということです。その後、神のさばきがあるということです。18節「まことに、あなたは彼らをすべりやすい所に置き、彼らを滅びに突き落とされます。」、いつすべるか分からない、いつそのさばきが来るか分からないのです。そして、20節には「目ざめの夢のように、主よ、あなたは、奮い立つとき、彼らの姿をさげすまれました。…」と、「夢」ということばを使っています。なぜなら、どんなにすばらしい夢を見たとしても、その夢から覚めた時にこれはただの夢であって現実でないことに気付くからです。彼らは気付くのです。自分たちは好きなように生きた、神に背を向けて好き勝手に生きて来た。でも、現実気付くときが来るのです。まさに、それはファンタジーであったように、彼らはその夢から覚める日が来るのです。神のさばきに会うときのことです。そのことをアサフは知るので。

(4) **アサフの悔い改め** : そして、アサフは悔い改めます。「私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。」と。まさに、自分は理性のない動物のようであり、世俗的であり信仰的でなかったことを告白するのです。「私は間違っていた」と。そして、彼は主にだけ信頼を置いて生き続けることを改めて告白するのです。23-24節「:23 しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかまえられました。:24 あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。」と、この地上でもそして永遠にと…。

(5) **アサフの告白** : 最後にアサフの告白が書かれています。主を信頼して生きることの祝福です。25節を見てください。「天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。」と。彼は彼にとってこの世のいかなるものよりも神が最高であると言います。自分にとって神が最高だ、この神と比べることの出来るものは何一つないと。26節「この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」、地上でこのいのちが尽きようと、私はそれで終わるのではなくて永遠を神とともに過ごすことが出来ると言います。

しかし、神に逆らう者たちはどうだったか？27節「それゆえ、見よ。あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。」と、アサフはこうして大切な真理に気付くのです。私たちの人生はこの地上だけではありません。その後があるのです。その後は永遠です。どこでその永遠を過ごすのか？神に逆らう者たちはこの地上のことしか考えずに自分の好き勝手に生きて、そして、楽しく過ごしている。でも、彼らは肝心なことを忘れている。私たちはみな私たちの創造主なる神に会う日が来るということです。罪の赦しを受けているなら神の祝福が約束されています、アサフのように。でも、罪の赦しを受けていないなら、その人に待っているのは永遠の滅びでしかない。

アサフはそのことに気付いた後、だから言うのです。28節「しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語りあげましょう。」と、一番大切なことに気付くのです。神以上にだれを私は望もうか、神が私にとって一番大切だ。この地上の生活においても、その先の永遠においても。皆さん、このアサフの葛藤は私たちも経験していませんか？神を知らない人たちが私たちの周りにたくさん居て、彼らの歩みを見たときに「まんざらでもなさそう、楽しそうにやっている、一見幸せそうにも見える。ひょっとして、私たちは信仰を持ったことが間違いだったのではないか。」などと考えませんか？私たちが気付かなければいけないのは、神のさばきを受ける日が来ることです。この地上だけでないのです。

皆さん、あなたの目にはその永遠の滅びが見えていますか？今、あなたの愛する者たちは、この救いを拒んでいるのなら確実にそこに向かっていきます。どんなに良い人間であっても、どんなに優しい親切な人であっても、イエス・キリストの救いをいただいでなければその人は永遠の地獄に向かっていくのです。あなたの愛する家族が…。私たちにはしなければならぬことがあるはずで。語ることに同時に、この神とともに生きることです。あなたは言えますか？「私にとっては神の近くにいることが幸せです。」と。私はこういうものを得たからとか、何かすばらしいものを手にしたからではなく、神がいてくださること、この方が私の神であることが私の幸せなのだ。

3. 常に主に祈ること

私たちは、常にみことばを思い起こすことが必要であり、常に神を賛美することが必要であり、そして、最後に「常に主に祈ること」が必要です。いろいろな誘惑に勝利しようと思うなら、私たちは神の前に助けを求め続けなければいけません。イエスはこのように言われました。マタイ26:41「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていないさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」と。

また祈りと言えば、イエスはこのような祈りを弟子たちにお教えになりました。一般的に「主の祈り」と呼ばれているものです。マタイ6:13「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』…」と、これは六つ目の願いです。でも、ここで言われていることは「誘惑に対していかに打ち勝つか」という

ことを教えられたのです。「私たちが試みに会わせないでください」と言うと、神が何か私たちに試みをもたらしめているかのように聞こえます。この「試み」ということばは新約聖書の中に21回出て来ますが、「誘惑、試練」と訳せることばです。はっきり言えることは、神が私たちが罪へと誘惑されることは絶対にないということです。最初にも見て来たように、私たちが罪に誘惑されるのは私たちの肉が問題なのです。ヤコブはこう言っています。ヤコブ書1:13-14「:13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。:14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」

この「主の祈り」の六番目は何を教えているのでしょうか。「誘惑に打ち勝つ」、そのことです。この祈りが教えていることは、罪を憎むとともに、その罪の力を恐れているクリスチャンが罪に陥ることがないようにと主に助けを求めること、それを教えたのです。というのは、誘惑に勝利する力が自分にではなく主にあることを知っているからです。「神さま、私が誘惑に負けて罪を犯すことがないように私を守ってください。誘惑が私を虜にして、あなたを悲しませる罪を犯すことがないように私を助けてください。自分の目が見るべきでないものを見ないように、耳が聞くべきでないものを聞かないように、手足がすべきでないこと、行くべきでないところに行かないように、どうか私を助けてください。」と、それがこの祈りが教えることです。私たちの心が正しくないことを考えないように、正しくない思いに心が満たされないように神に助けを求めなさいと、そのことを教えるのです。

なぜ、イエスがこのようなことを教えられたのか？それはイエスご自身が罪への誘惑の力を経験されたからです。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」（ヘブル4:15）と、あのサタンの誘惑をお受けになったのはイエスです。その力がどんなに強いかを知っておられます。また同時に、サタンの狡猾さも知っています。だから、イエスは弟子たちにそのように教えたのです。あなたは祈り続けることが必要だ。「主よ、どうか私を守ってください。誘惑に負けて罪に陥らないように、どうか私を助けてください。」と、これがこの祈りが私たちに教えてくれていることです。

さて皆さん、みことばは私たちに罪に勝利することが出来ると教えています。もちろん、その力は私たちのうちにあるのではない、神のうちにあります。そして、その神の力が与えられている以上、私たちは罪に勝利出来るのです。そういう歩みをしなさい、そのように生きていきなさい、勝利者として生きなさいと。もうあなたは罪に対して勝利者なのだから、そのように生きなさいということです。

私たちの責任は主が教えてくださったことを実践することです。そのことばを信じて、その約束を信じてそのように生きることです。どうか、皆さんがこの一週間そのように歩いて、「確かに神のおっしゃることはその通りだ」と、そのように証することです。主の栄光が現されるようにと心から願います。実践によって私たちは神の栄光を現し、私たち自身の確信を増していくことになります。頭ではわかっています。神のおっしゃることは真実だと…。でも、それを実践してみても初めて、確かに、神のおっしゃることは真実だと、その確信を深めていくのです。どうか、この一週間そのように歩いて神のすばらしさを証してください。